善心惡心

里見弴

善心惡心

里見淳著

短篇小說第一集
大正五年十一月版
春陽堂發行

大正五年十一月十二日印刷
大正五年十一月十五日發行

（善心惡心）
（實價金九拾錢）

著作者　里見弴

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地
和田利彦

印刷者　東京市本所區番場町四番地
朝岡平藏

印刷所　東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地
春陽堂
電話本局五一番
振替口座東京一六一七

名著複刻全集 近代文学館 昭和44年 4 月

目次

河豚……一
勝負……一五
母と子……三一
箱根行……七一
俄あれ……一一三
……一四九
晩い初戀……一九一
夏繪……二二五
嫂の死……二七九
善心悪心……三一一

河

豚

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

宙乘りから落ちて右腕を怪我した中村高麗之助の代り役で博多まで下つた歸り途に、實川延童は廣島で腦を惡くした。或る雪の降つた日十一時頃から飲み始めて、夕方には、いつにない醉ひと頭痛とを感じて、障子紙のボコ〳〵、ボコ〳〵ともの靜かに鳴るのを聞きながらその小座敷で横になつて了つた。その翌日から折々頭腦がカツカと逆上せて來るのが癖になつた。疲れきつたやうにぼんやりして了ふことや、折にはまた、妙に自分のして來たことなどが思ひ出されるやうな、腦の明晰した時があつた。夜も安眠できなかつた。

とつて二十九になる正月は大阪へ歸つてした。十四日の晩は增川の後家と伊豆德で泊つた。九時頃に起きて見ると、ドンヨリした、期節はづれに暖い日だつた。獨で

椽先へ出て、どこに焦點を置いていゝか解らないやうなウツ〳〵した雨もよひの空を眺めてゐると、不意に、廣島以來おぼえのない恍惚としたこゝちに襲はれた。見るまに空が落ち窪むで行く、それに視線を手繰り込まれて、フラ〳〵と眩暈が來た。それでも復座敷へ歸つて二三杯やつてゐるうちにはハツキリして來た。玉庄の河豚もうまかつた。

「たべんか」

「ほンならよばれまツさ」

そこへ來た藝妓も箸をとつた。一體玉庄の河豚と云へば、「もしあたつたら生むで返す」と自慢してゐたくらゐで、誰一人そのために命を氣づかうやうな者のありやう筈もなかつた。それだのに延童は、ふと、この河豚にあたつて死にでもしさうな氣がした。しかし、急にさう云ふ神經質な心持に襲はれるのは、廣島にゐた間にたび〳〵經驗したことなので、そのまゝ直ぐに忘れて了つた。それに河豚は何よりの

好物で始終たべつけてもゐたから。

その午後は某の前茶屋で京の初芝居の稽古があつた。自身は德兵衛の役で、璃幸のおふさと白を疊むで行くうちに妙に舌がギゴチなくなつて來た。

「なんや知らんけど口がけッたいでしョがない」

こんなことを云ひながらも稽古を終つた。それから坂町の自宅への歸り途に、近所にゐながらつひぞ尋ねたこともなかつた名馴みの藝妓の屋形の前を通つて、ちよッと寄つてみる氣になつた。その時分にはヒドく逆上せて來た。目やら鼻やらが何んとなく潤むで來るほど熱かつた。

「えらいえゝ色してなはるな」

顏を見るなりこんなことを云はれたが、もうその時はとうに酒氣の去つてゐる時分だつた。

「ちよッとも酒のんでへんぜ。廣島で腦わるなつてから、ちョこ〳〵こない逆上せ

てどんならん」

さう云ひながらふと先刻食つた河豚のことを思ひ出した。と云ふより、その時不思議にもあたりさうな氣がしたことを思ひ出した。

「ひよッとしたら今朝の河豚にあつたつたかも分りやへん」

藝妓は笑つて取りあげなかつたが、急に思ひついたやうに。

「あさ河豚たべなはッたのか。小豆ご飯と河豚と食べたらあきまへんぜ。お正月やよつてひよッと小豆ご飯たべてなはれへんか」

「小豆斷つてんねんで。頭痛もちやさかいに」

こんなことを云ひあつてゐるうちにもだん〳〵自身の體に何かしら異變の起りつつあることが慥かに感じられて來た。先刻あんな延喜でもないことを考へたから——氣のせいだ、とも思ふが、また、これでポックリ逝つて了はないものでもない、とも思はれた。けれども、けさ伊豆德の二階で欄干に凭れて、懷手で、恍惚と空を

眺めてゐた自分が、つい先刻德兵衛の白を工風しい〳〵橋を渡つて歩いてゐた自分が、ゆうべの、あれほど樂慾を恣にした自分が、それよりも現に今かうして長火鉢の前に坐つてゐるこの自分が假にも死なうなどゝは、餘り馬鹿げた妄想だつたと、直ぐに思ひかへた。よし今朝から何か體に異變が起つてゐるとしても、假令河豚にあたつてゐるとしても、それでこの自分と云ふものが無くならうとは、(人間は死ぬものだとは知れきつた話だが)所詮考へられることではない。來年のことを云へば鬼が笑ふと云ふが、それ以上、何が笑ふか知れないほど考へられないことのやうな氣がした。それだけに、或は死ぬかも知れないと云ふやうな冗談も、藝妓相手に、呑氣な心持で云つたりした。

「河豚食つて、河豚にあたつて、ふぐにお暇や」などゝ戯れてゐた。いつともなく、手足や唇などのギゴチなさが次第に加はつて來てゐるのも心づいてはゐたが、氣持はふだんより却つてハツキリして快かつた。こんな時なら何をしても、舞臺の上の

ことばかりではなく、勝負ごとでも、日ごろ嗜む手細工のやうなことでも、何んでもうまく行きさうな氣がした。

しかし、夕方の六時頃には、延童の體はもう彼の自由にはならなかつた。口も利けなかつた。そとから歸つたまゝの黑の紋服のなりで、床の上に抱き移された。それでもまだ顏色などはふだんより美しく見えるくらゐだつたし、近所の醫者が來て炬燵を入れさせた時など、自身で蹶出すくらゐの力も殘つてゐた。

いつともなくに家のなかは、それからそれと聞き傳へて來る男女の見舞客やら手傳ひでいつぱいになつた。ひそめきながらも出這入る人々の氣勢は、隣り近所まで何んとなく不安な空氣を撒きちらした。弟の小延童は默つて井戸ばたへ出て水垢離をとつてから、羽織の紐を結びながらに出て行つて了つた。日ごろ信心する千日前の金比羅樣へ參つたのだ。上の弟の鬼昇はそのとき駈けつけて來た伊豆德のお女將の言葉に從つて、兄の蹠に灸をすえてみた。姉の喪もあけないうちにと云つて、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

笠屋町に住む、こゝの兄弟には叔母にあたるひとは唯おろ〳〵と嘆き悲しんだ。憂愁と祈願の時が重く早く經つて行つた。

當時の名優海老十郎が見舞に來た頃にはもう大分に夜も更けてゐた。案内して來た男は途中ではたの人にせわしなく呼びかけられて、「どうぞあちらへ」と云ひ置いたまゝ、床の敷いてある部屋の襖のところから小走りに引き返して行つて了つた。丁度延童の體が椽先の土に埋められた時だつた。華美な縞り枕を支つた首だけが幾つもの色の違つた灯に照し出されてクッキリときわだつて見えた。その、安々と眠つてゐるとしか見えぬ美しい顔に何か少しでも變が起つて來るのを、四五人の極く近しい男たちばかりで見守つてゐた。濕ッぽい土の匂ひは冷々とした夜氣にこもつて、人々の腦のなかまで浸み込むで行くやうだつた。ひとり酒井國手は人影の靜かに搖ぐ石燈籠のそばまで身を退つて、兩手を前で握り合せてぢッと立つてゐた。その容子には、能を有ちながらその處を得なかつたものゝ奥ゆかしい控えめな慎みが

現はれてゐた。人々の注意のそとになつたこの二人は自然と近よつて、低い聲で挨拶を交した。

「もう、どないしてももどりまへんのか」

「私の考ではもういけますまい」

「なんだつか？河豚にあたつた……？」

「さうです、河豚の中毒で。誠に氣の毒でした」

醫者は少しも自分を辯護するやうなことは云はなかつた。

「フウン」と海老十郎は不機嫌に唸つて、死んで行く人を咎めるやうに首を二三度横に動かした。

これきりでこの二人もはたの沈默に吸ひ込まれて了つた。

その時分になつて、丁度眠りから覺めたやうに、延童の微な命には再びこんなことを考へるものが動き始めた。

大分永いこと氣を失つてゐたやうだ。一體どうしたんだらう。(かう思つて、ちよつと不安に感じた。)何んでもこれは不時の出來ごとではない。どうしてもかうならなければならなくつて、かうなつたのだ。何しろそれだけは慥かだ。して見ると廣島以來の腦病かな?それより他にない。なんだあのくらゐな腦病で……(かう思つて不意に可笑しくなつた。自分のまだ極く輕い腦病のために命までも氣づかつたことが、ちよつとでもそんな氣になつたことが既に馬鹿げきつた滑稽に感じられたのだ。この考へで一時に愉快になつて來た。)――たしか、前にも一度こんなことがあつた。(と、また考へ續けた。)その時にも死ぬかと思つて、あんまり馬鹿々々しいので可笑しくなつて了つた。さうだ、何から何まで丁度あの時とをんなじだ。(この發見は益々彼を愉快にしたので、暫くは、同じ大さのものを重ねるやうにピタリピタリと合ふ、いつのことよも解らない或る以前の記憶をたどつてゐた。)さう〳〵、さう云へば親仁だつてさうだ。(竹田の芝居が燒けた時の有樣がマザ〳〵と目の前に浮

んで來たのだ。)あのとき額十郎さんは松王と千代とを早替りで勤めてゐた。もう火事だ火事だと云つて人が騒ぎだしてゐるのに、親仁はすまして松王の鬘を持つて額十郎さんの部屋の方へ行つたつけ。さあそのうちに奈落へ火が廻る。——もうあれから九年になるなァ。(その火事の翌る日よりも、その後思ひ出したどの場合よりも、今が一番ハツキリとその時のことを思ひ浮べてゐる。それをちよつと不思議に思つた。)二度目に部屋からとつて返して非常口の方へ駈けて行くとまた親仁に遇つた。矢つ張り兩手で大事さうに松王の鬘を持つてゐた。驚いて、お父さん危い〳〵つて、思はず大きな聲で云ふのを見て、親仁はクスリ〳〵ひとりで笑つてゐたつけ。火事で燒け死ぬなんて、ちよつとでもそんなことがあらうと思ふのが、もう可笑しかつたんだらう。丁度おんなじなんだ。

——どうだらう、よもや命に別狀はあるまいな。それだけ一寸酒井さんに尋ねて置かう。何しろあの竹田の芝居の火事だつて大變な人死にだつたんだから。第一あ

んなに落ちつき拂つてゐた親仁が矢つ張り燒け死んでゐるのだからな……。

かう思ひつくと、まるでそれまで思ひ設けなかつた、喰ひ込むやうな不安がみるみる擴がり覆ひかゝつて來た。――口を利かうとした。しかし、かつてものを云ふ法を知らなかつた人のやうに、どうしてよいのかあてすらつかなかつた。その苦みの表情も、もう、蒼白い延童の顏の筋肉までは浮んで來なかつた。

一時間ほどの後に、延童の體はまた掘り出されて床の上にあつた。

「惜い人だつた」

海老十郎に一と言かう云はれて、小延童は堪へてゐた涙を流した。多見藏も來てくれた。珊瑚屋の妾の泉さんはもう公然と亡き情人の枕邊ちかくゐた。お峰、小しつ、――通夜の席にゐたのは以前に關係があつたと云ふやうな、もう姐さん株の年增が多かつたが、中には若い妓の目を泣き腫してゐるのも混つてゐた。

翌日から玉庄は永く店をとぢて了つた。

明治十六年のことである。

大正二年十二月作「實川延童の死」改題

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com